

(6) 人間と社会教育部会

教育部会名	人間と社会
部会長名／作成者名	藤田 裕嗣
概 要 (2 ページ)	
<p>(1) 組織・運営について</p> <p>「人間と社会」教育部会は、1 機構・3 研究科を主体に、非常勤講師を含む 24 名から構成され、基礎教養科目として社会科学系の「社会学」、「地理学」、総合教養科目として「社会思想史」、「文化人類学」、「現代社会論」、「越境する文化」、「生活環境と技術」、「学校教育と社会」の 8 科目を担当している。機構および研究科ごとに、教員の専門領域に応じた担当授業配分がなされており、当該部局のルールによって授業担当者を決め、全体的な調整は部会長（1 名）、幹事（2 名）が取りまとめている。当部会の組織構成と運営は適切に整備され、うまく機能し続けていると総括している。</p> <p>(2) 実施状況について</p> <p>本教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身に付けることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリン（社会学、文化人類学、地理学、社会思想史）、および②現代的諸課題（現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会）の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供している。本教育部会が提供する授業の目標は、シラバスにも見られるように、全学共通授業科目の科目区分ごとの教育目標に対応しており、授業担当者は到達目標を、共通目標に沿ったものにするよう、配慮している。ただし、いずれも個々の学問分野の導入的な内容になっている。</p> <p>教育の目的に照らして、講義、演習、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されている。一方で、「新型コロナ禍」への対応のため、昨年度に引き続き「遠隔授業」が主とされ、授業方法など即座に対策は難しいなど、今までの蓄積がそのまま生かせない場面もあったが、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに実験や小集団教育などを使用したものから、全て講述からなるものまで授業方法の多様性は担保されたと総括している。</p> <p>単位の実質化に関しては、多人数クラスのため行き届かない部分もあるが、可能な限り配慮されている。具体的には、それが可能なサイズの授業では毎回、課題を掲げ、学生の自主自習を促したりするなどの工夫が行われている。毎回授業に対するコメントを書かせて提出させ、双方向的な要素を取り入れるような腐心も見られた。</p> <p>授業内容は、概ねシラバスに沿って展開されている。個々の教員は、資料配布、映像・音声資料等の活用、コミュニケーションカード等の活用、双方向的な意見紹介やコメント、高校の学習内容との連続性の確認、受講生の既存の知識や観点を相対化する問題提起等、多様な工夫・努力を行っている。映像を使える講義から理論的、そして純粹に思想的な内容の講義まであり、中にはシラバスにおいて大枠で内容を掲載している科目もある。このことに関しては、教員側の想いもある一方で、時代の流れとして詳細なシラバスの表記が求められていることから、話し合いを重ね、同意のもとに、より良い方向になるよう、今後も努力していく所存である。</p> <p>特に今年度は「新型コロナ禍」の対応で、オンデマンド式を採用した講義もあり、受講生が目の前にいないがために、双方向の良さが失われ勝ちだった恨みは残るのも事実だが、制約がある中で、一定の努力はなされた、と評価したい。</p> <p>(3) 課題について</p> <p>授業規模には大きな幅がある。本教育部会の授業は概して人気が高く、総じて履修者数が多い事態には変わりがないが、20 人前後から 200 人前後と多岐にわたっている。</p> <p>「新型コロナ禍」への対応で今年度も「遠隔授業」が主とされたが、従来からの講義形式に関する課題を敢えてここで再論すれば、元来、教養教育の大規模クラスに使う</p>	

いる棟は、必ずしも授業をしやすい環境とは言えず、長期的にはもっと効率性の高い教室が求められている。今日、出席点を望む学生は少なくないが、大規模クラスで出席を取ることで、容易ではないし、学生の注意も拡散し勝ちである。試験結果によれば、授業内容に関する理解と出席の頻度との対応関係は必ずしも認められないのは、この部門の科目の人文的性格に起因するのかもしれない。

具体的にどういう形の講義が受講生に対して、内容理解の深化に繋がるのか、模索すべき課題が多いのは確かである。各スタッフはこれらについて一層の試行を展開する必要があるであろうし、そのことへの評価も、カバーしている学問分野の広さゆえに、短期に判断を下せるような事柄ではないように恩われる。

学生の授業評価のうち、自己学修の時間についての設問で 60 分未満の学生の割合が多いのは相変わらずで、授業内のみで終わらず自己学修につなげる努力が望まれる。内容理解や目標への到達度、総合評価に関しては、概ね高い評価が得られていると考えているが、評価に幅が認められる科目もある。「地理」学など高等学校までと同じ名称の科目であっても、研究手法や視点が異なり、学生が既存のものと考えていた内容と違う科目もある。それを高く評価する学生もいれば、受け入れるのに時間を要する学生もいると考えられ、そのような科目については評価に幅が出たものもあると言えよう。

29 年度からクォーター制が実施されている。学生は 1 クォーターごとに履修する科目を変えており、授業する側は、その 1 クォーターのみで科目の概要を示さなくてはならない。しかし、とりわけ社会学、地理学、文化人類学、社会思想史等のディシプリンにとっては、7.5 回という短い回数で学科の概略を示すことは難しい要求となっている。当然現代の学生にとって面白そうなトピックを並べ、学科に興味を持ってもらうという形の授業となる。受講学生も多様であり、それで一向に構わない学生もいれば、もう少し学科の概要を学びたいと考えている、あるいは学ぶ必要のある学生も少なくない。〈人間と社会〉を構成する学科群にとって、クォーター制度は、現在のところ、授業をトピックのいくつかの並列的提起、そのことによる学科への関心の喚起というレベルに終始させる面が強いが、学科の基礎の学習にはならない可能性が高い科目もある。各教員は所定の 7.5 回分で学科の今日的なあり方の概要を示すべく、試行を繰り返しているし、今後も工夫を重ねる必要があるだろう。科目によってはsemester制の方が適するものもあるが、カリキュラム上の事務的な面から当面の変更は難しいと考えられる。授業内容・方法について、今後も工夫と議論の積み重ねが不可欠なのは、必然であろう。

理論的、思想的学科を学生に教えることは、今日の大学で日々難しくなっている。教養科目を受けるべき理由が判らない、と授業後に直接（またはメール等で）訴える学生も確かにいる。今日の受験制度が学生一人一人の学問への「関心」を内発的に育てる形にはなっていないという重大な問題もあり、授業の方法論だけでは処理し切れない問題がある。何せ一般的に履修者が多く、試験の採点が 2 回から 4 回に増えたことも加わって、採点スケジュールを充たすこと自体が、時間的にも、体力的にも厳しい状況にある。そのような現状を考えれば、部会としては比較的よく健闘していると判断される。

（４）総合所見

平成 30 年度は、人間と社会教育部会の外部評価がなされ、部会として取り組むべき問題点・課題を明らかにしていただけた。それ以来、シラバスの統一性をはかること、授業評価アンケート結果の分析と課題の洗い出し、アクティブラーニング・体験型学習の具体的なエビデンス・効果の分析と授業改善への取り組み、クォーター制・semester制のメリットとデメリットの分析と授業改善への努力という様々な課題に対して取り組んできた。神戸スタンダードなどの取り組みにおいて、複眼的に思考する能力や、多様性、協働力を育てようとする取り組みや、さまざまな努力に対して、総合大学のメリットを十分活用した取り組みを行っているとの評価がなされる一方で、取り組むべき以上の問題点に関して、さらなる課題の解決に努めていきたい。

A 組織構成と運営体制について

- ①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか (100 字程度)

機構および研究科ごとに教員の専門領域に応じた担当授業配分がなされており、当該部局のルールによって授業担当者を決め、全体的な調整は部会長 (1 名)、幹事 (2 名) が取りまとめをしている。当部会の組織構成と運営は適切に整備され、機能している。

根拠資料

教育部会構成員名簿

B 内部質保証について

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか (100 字程度)

授業にもよるが、毎回の授業毎に履修者に感想用紙、アンケート、課題プリント等を提出させ、次回の授業時に質問・意見等に回答・コメントするなど、日常的・質的な授業評価を行っている。各クォーター末の「授業振り返りアンケート」より、学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を行っている。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか (150 字程度)

本部会は、複数の機構・研究科に跨りつつ、自己点検・評価報告書を周知し、個々の問題点を改善するようにそれぞれ努力している。特に教育に関する問題点については、講義、演習、実験、実習等の授業形態を適度に組み合わせ、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導を行い、また平成 29 年度ではあるがピアレビューもしながら、対応を行っている。なお、今回は、来年度、すなわち令和 4 年度に予定されている。

根拠資料

前年度までの自己点検・評価報告書、平成 30 年度外部評価報告書、シラバス等

- ③授業の内容及び方法の改善を図るための F D を組織的に実施しているか (100 字程度)

平成 29 年度のピアレビューや平成 30 年度の外部評価委員会などに部会員の参加を呼びかけるなど組織的に対応を諮っている。ちなみに、後者は今年度の部会長も参加したので、部会員にも一部を報告し、徹底を図った。

根拠資料

ピアレビュー(授業参観)実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧(国際教養教育委員会資料)、平成 30 年度外部評価報告書

- ④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるときともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか (100 字程度)

TA などを配置し、教育活動を展開するために必要な教育補助者を適切に活用している。それらの者が担当する業務に応じて、必要な質の維持、向上を図る取組を諮っている。

根拠資料

神戸大学 SA/TA 実施要領・ガイドライン、SA/TA 採用者名簿、TA ハンドブック

C 教育課程と学習成果について

①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100字程度）

「人間と社会」教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身につけることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリンおよび②現代的諸課題の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供しており、それぞれの授業の目標が全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっている。

根拠資料

シラバス

②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100字程度）

授業担当者を始めとする部会員には部会長と幹事を通じて自己評価報告書や外部評価報告書を周知し、共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされている。

根拠資料

シラバス

③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100字程度）

授業担当者に周知し、各授業科目の内容は、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっている。さらに、「主体的、対話的で深い学び」を主とする新しい学習指導要領が来年度高等学校でも始まるので、その学年が大学生となる4年後には大きく変わる可能性に期待したい。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料

④単位の実質化への配慮がなされているか（100字程度）

多人数クラスの場合、行き届かない部分もあるが、可能である限り配慮されている。具体的には、それが可能なサイズの授業では、毎回授業に対するコメントを書かせて提出させ双方向的な要素を取り入れることに腐心したり、毎回課題を掲げ学生の自主自習を促したりするなどの工夫が行われている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料

⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150字程度）

授業方法は、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに小集団教育などを使用したものから、すべて講述からなるものまで多様である。授業資料は、十分に用意されている。また、シラバスに沿ったレポート課題の設定と指導を行なう、レポートにおいて学生の興味関心のあることを選択させたり、毎回、前回の授業内容の復習、再確認をするなど様々な工夫がなされている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材

⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50字程度）

程度)

シラバスは、思想的、理論的科目の場合は、講義の性質上おのずと限界があるが、各項目について概ねこまかく予告、解説されている。

根拠資料

シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか (100字程度)

学生への履修指導は適切に行われていると考えている。具体的には、第一回の授業時に詳細なガイダンスを実施する、ガイダンスの内容を記した資料を配布するなどの工夫を行い、受講生に対し授業科目の詳細な内容が伝わるよう、丁寧な説明が目指されている。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援を適切に行っている。

根拠資料

シラバス、配布資料、授業振り返りアンケート結果

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか (100字程度)

行き届かない部分も当然あるだろうが、可能な範囲で行われている。具体的には、質問を受け付け、授業時において回答する、設定したオフィスアワーを活用する、個別の支援の要望に対し柔軟に対応するなど、さまざまな工夫がなされている。授業後の質問にも、時間が許すかぎり答えている。

根拠資料

シラバス、配布資料、授業振り返りアンケート結果

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか (100字程度)

成績評価基準についてはシラバスに明示されている。そして、その基準に則った成績評価が適切に実施されている。また、成績評価基準を授業時に受講生に対し詳しく説明するなどの工夫も行われている。科目単位での成績分布を確認し、適正でない場合には、適正な分布になるように促すよう努めており、概ね適正である。

根拠資料

シラバス、試験答案、成績分布(国際教養教育委員会資料)

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか (100字程度)

多人数のクラスの場合、どうしても一定程度の限界があることは否めないが、各教員の努力と創意工夫により、受講生の学習成果が上がるよう努力されている。試験の出来は悪くなく、優秀な答案を書けるまでになる人材も、常に一定程度存在している点は、本年度の「遠隔授業」でも不変であった。本学学生のポテンシャルの高さも大きかろう。学生を対象とした授業振り返りアンケートの結果からも、人間と社会教育部会の授業では適切な学習成果があがっていると考えられる。

根拠資料

試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果